

# 内子町における地域づくりと観光振興政策(2)

鈴 木 茂

はじめに

## I 内子町の地域づくりの展開

- 1.1 1970年代－歴史的重要な建造物群保存と合意形成
- 1.2 1980年代－歴史的町並み保存事業の展開と地域政策の基本コンセプト
- 1.3 1990年代－村並み保存運動と産直市「からり」の開設
- 1.4 2000年代－グリーンツーリズムへの新たな取り組み
- 1.5 市町村合併と住民自治組織

## II 内子町の地域づくりの特徴と開発効果

- 2.1 継続性と総合性
- 2.2 行政主導から住民主体へ
- 2.3 都市と農村の交流の拡大
- 2.4 住民の内発性と企業家精神                      〈以上本誌第18巻第1号〉

## III 開発効果と観光客の増加

- 3.1 内子町の「全国ブランド」化と観光客の増加
- 3.2 観光客の特徴とマスツーリズム化の傾向
- 3.3 マス・ツーリズム化と経済効果の限定性
- 3.4 観光と生活の対立

## IV 内子町の観光振興政策の課題                      〈以上本号〉

### III 開発効果と観光客の増加

#### 3.1 内子町の「全国ブランド」化と観光客の増加

内子町における地域づくりの取り組みは、住民の内発的な事業の取り組みを誘発するとともに、観光客の増加となって現れている。町並み保存が話題になり始める1970年代半ば頃、内子町の入込み観光客数は年間1万人程度にとど

まっていた。当時、内子町は観光地としてはほとんど認知されていなかったといえる。内子町では木蠟産業が衰退した後、それに替わる産業が創出されなかった。小田川流域に僅かに水田があるものの、耕地面積が狭く、養蚕やタバコ・果樹栽培などに転換されたが、中山間地域にあることから高度成長期の開発の対象とされなかった。その結果、江戸末期から明治・大正期の繁栄を偲ばせる建造物が偶然残されたのであり、積極的な保存政策の結果ではなかった。観光客が増加しはじめたのは、内子町が文化庁の調査対象地域となり、『アサヒグラフ』で紹介されたのをはじめ、雑誌やテレビなどのマスコミで取り上げられるようになってからである。1980年には年間13万人を数えたのをはじめ、90年代前半まで順調に観光客数を増加させ、95年には50万人を超えた。その後、90年代の平成不況の影響を受け、観光客数が伸び悩んでいたが、2004年には町並み博が行われたこともあり60万人を超えた。但し、観光客の増加は日帰り観光客の増加によるものであり、90年代後半になると停滞傾向にあることに留意する必要がある。2004年は内子町を中心とする町並み博が開催されたことから前年より大幅に増えて60万人を超えたが、2005年以降も観光客数が増加するかどうか観察を要する。

観光客数の増加は、町並み保存事業として推進してきた伝統的文化施設への入館者数を増加させ、また、入館料収入を増加させている。1985年度に内子座、1988年に素巧館、1990年度に歴史民俗資料館が改修・開館された結果、観光客数が増加している。1981年度の入館者数1万1,000人、入館料収入は195万円程度であったが、90年度には7万人、2004年度には16万5千人を超えた。入館料収入も2004年度には4,200万円にのぼり、1981～2004年度の累計で5億5千万円を超えた（表4参照）。

しかし、日帰り観光客数が増加しているが、宿泊客数が92年をピークに減少している。宿泊客は80年の9,200人から92年には2万9,620人、3.2倍に増加したが、その後減少に転じ、2004年にはピーク時の約半分に減少している。宿泊施設別にみると、宿泊客数を減少させているのはホテル・旅館であ

表4 伝統文化施設年度別入館者数及び入館料収入金額の推移

(単位:人,円)

年度	資料館上芳我邸		内子座		素 巧 館		歴史民俗資料館		合 計	
	入館者数	収入金額	入館者数	収入金額	入館者数	収入金額	入館者数	収入金額	入館者数	収入金額
1981	11,179	1,956,400	0	0	0	0	0	0	11,179	1,956,400
1982	13,228	2,326,110	0	0	0	0	0	0	13,228	2,326,110
1983	13,903	2,429,370	0	0	0	0	0	0	13,903	2,429,370
1984	21,826	3,793,560	0	0	0	0	0	0	21,826	3,793,560
1985	21,968	3,874,140	3,837	674,600	0	0	0	0	25,805	4,548,740
1986	32,662	5,822,810	17,120	2,989,700	0	0	0	0	49,782	8,812,510
1987	28,300	5,080,260	13,788	2,426,400	0	0	0	0	42,088	7,506,660
1988	26,460	4,759,000	12,328	2,193,250	881	251,830	0	0	39,669	7,204,080
1989	28,484	5,112,860	16,407	2,821,220	4,336	662,330	0	0	49,227	8,596,410
1990	35,398	5,894,040	20,198	3,177,600	11,922	1,758,860	2,796	431,080	70,314	11,261,580
1991	40,541	6,805,730	25,311	4,025,880	13,864	2,050,520	14,251	2,069,060	93,967	14,951,190
1992	48,555	8,079,920	27,721	4,466,450	15,398	2,275,610	14,786	2,139,660	106,460	16,961,640
1993	54,827	9,136,630	35,381	5,711,040	18,739	2,761,720	18,095	2,617,410	127,042	20,226,800
1994	59,255	9,912,200	43,684	7,154,140	22,102	3,245,440	21,393	3,128,630	146,434	23,440,410
1995	79,088	24,352,000	77,275	18,580,960	35,846	5,191,170	37,661	5,457,940	229,870	53,582,070
1996	59,957	19,774,950	61,922	15,770,370	29,027	4,230,990	30,948	4,586,610	181,854	44,362,920
1997	57,945	19,027,500	72,604	18,449,460	25,949	3,733,590	29,328	4,336,250	185,826	45,546,800
1998	50,827	16,701,480	61,599	15,798,990	22,949	3,284,550	25,971	3,898,540	161,346	39,683,560
1999	53,770	17,584,110	67,308	17,347,930	23,528	3,348,010	26,931	3,996,470	171,537	42,276,520
2000	48,216	15,479,260	61,602	15,735,060	0	0	29,011	4,246,110	138,829	35,460,430
2001	49,797	16,068,500	65,632	16,819,340	0	0	31,860	4,714,500	147,289	37,602,340
2002	47,102	15,302,320	63,145	16,397,190	0	0	30,106	4,517,760	140,353	36,217,270
2003	48,184	15,527,870	71,307	18,464,240	0	0	33,306	4,970,180	152,797	38,962,290
2004	55,628	17,787,500	74,141	19,139,860	0	0	35,887	5,441,460	165,656	42,368,820
合計	987,100	252,588,520	892,310	208,143,680	224,541	32,794,620	382,330	56,551,660	2,486,281	550,078,480

(出所) 内子町役場資料より作成。

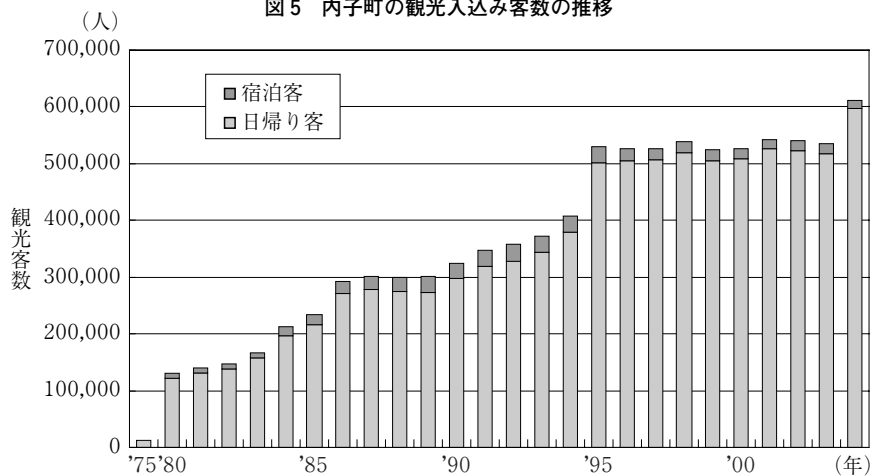
(注) 1. 資料館上芳我邸は1980年5月1日仮開館, 81年4月1日正式開館。

2. 内子座は1985年10月5日開館。

3. 素巧館は1988年11月10日会館, 2000年度から保存センターに変更。

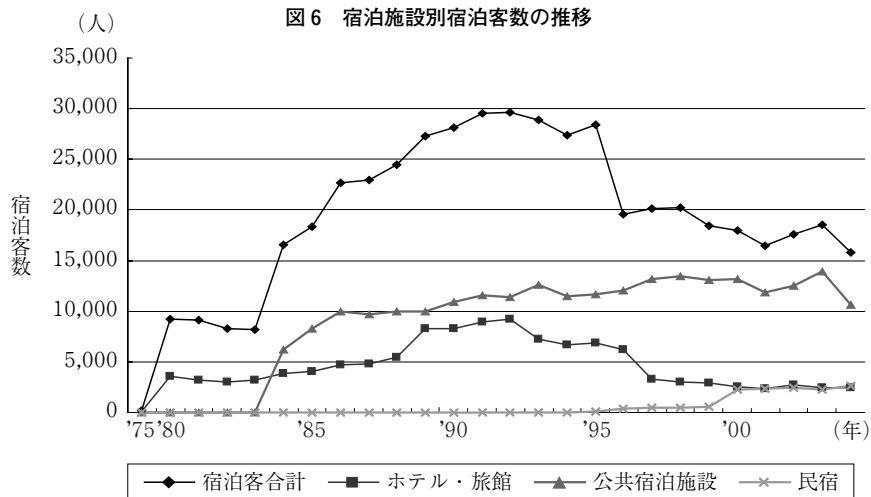
4. 歴史民俗資料館は1990年11月24日開館。

図5 内子町の観光入込み客数の推移



(出所) 同上。

図6 宿泊施設別宿泊客数の推移



(出所) 同上。

り、ピークの94年の9,260人から2004年には2,407人、4分の1に減少している。他方、公共の宿泊施設（「石畳の宿」、ハイプラザ内子）は1万人から1万3,000人の宿泊客を確保している。また、民宿の宿泊者数は着実に増加しており、1995年の101人から2004年には2,677人、26倍に増加している。民宿の宿泊者数が絶対的に少ないことを考慮する必要があるが、2004年にはホテル・旅館の宿泊者数を上回っており、内子町におけるグリーンツーリズム運動の盛り上がりと農家民宿の開設が寄与しているものと思われる（図5、6参照）。

### 3.2 観光客の特徴とマスツーリズム化の傾向

内子町総合観光センターと協力して2005年11月26日に実施した観光客に関する実態調査<sup>26)</sup>によれば、観光客の特徴の第1は、観光客の来訪地域が全国に拡大し、内子町は観光地として全国的に認知されていることであり、4分の3が県外からの来訪者である<sup>27)</sup>。観光シーズン終了間際の11月最後の土曜日であったにも拘らず、南は宮崎県、北は北海道から観光客が来訪しており、内子町は全国的な観光地として認知されていることを確認することができる<sup>28)</sup>。

第2は、内子町は四国ツアーの一環に組み込まれていることである。多くの観光客が大型バスで訪れ、歴史的町並み保存地区と大正期の芝居小屋である内子座を視察して足早に次の観光地に行く姿がみられるようになった。内子町が重要伝統的建造物群保存地区として全国的な認知を得るとともに、マスツーリ

---

26) アンケートは内子町観光センターと松山大学総合研究所及び経済学部鈴木ゼミナールとが連携して行ったものである。アンケートは11月26日(土)に、町並み駐車場・上芳我邸前・内子座・JR内子駅及び「からり」の5ヶ所で学生達が行った。多くの観光客の皆さんの協力を得て、アンケートの回収は総数442にのぼった。また、アンケートの集計・分析は内子町観光センター職員と学生とが行った（鈴木茂他 [2006]）。

27) 内子町の調査によれば、2004年度の観光客全体（61万2千人）に占める県外客（48万8千人）の占める割合は79.7%である（内子町役場資料）。

28) 「からり」とその他の地域では大きな違いが見られる。全体では県内からの来訪者は4分の1程度であるが、「からり」については県内からの来訪者は4分の3（75.8%）も占めている。逆に、「からり」の来訪者のうち県外者は4分の1程度しか占めていない。歴史的町並み保存地域と「からり」地域とでは、観光客のタイプが異なることがわかる。

表5 内子町来訪者の利用交通機関別内訳

年度	定路線交通機関	貸し切りバス	自家用車	その他
1975	2,500	0	10,500	0
1980	10,100	8,400	102,480	9,829
1981	10,800	6,275	110,200	13,494
1982	7,330	10,700	116,445	12,200
1983	7,030	9,650	132,526	11,900
1984	12,000	23,000	167,526	10,000
1985	13,000	25,000	186,300	10,000
1986	57,000	30,000	196,000	1,000
1987	63,000	32,000	206,000	1,000
1988	67,000	30,000	202,000	1,000
1989	67,000	30,000	203,000	1,000
1990	90,000	30,000	204,000	1,000
1991	94,000	33,000	220,000	1,000
1992	95,000	34,000	228,000	1,000
1993	100,000	40,000	232,000	1,000
1994	109,000	52,000	245,000	1,000
1995	142,000	68,800	317,500	1,020
1996	114,000	195,840	214,640	1,002
1997	112,860	187,360	225,648	1,000
1998	114,936	192,397	230,590	1,000
1999	110,544	189,131	223,708	524
2000	70,413	167,411	288,389	500
2001	76,467	172,131	293,089	500
2002	72,416	172,853	294,329	507
2003	75,712	169,857	289,235	503
2004	82,469	201,925	327,241	617
3町合計	87,628	253,731	518,262	2,860

(出所) 同上。

ズムの対象地域になっていることがわかる。もちろん、単に町並み見物だけでなく、保存された農村景観の視察を目的とする観光客も一定の割合を占めており、グリーンツーリズムの取り組みがそうしたツーリズム客の増加に貢献していることは間違いない。内子町の調査によれば、内子町来訪者の利用交通機関別内訳を2004年度で見ると、自家用車が最も多く32万7千台であるが、貸し

切りバスが急速に増大している。貸し切りバスは1980年には8,400台、自家用車（10万2千台）の8%程度にすぎなかったが、2004年には20万1千台、26倍に増加し、自家用車の6割に相当する貸し切りバスが内子町を訪れている（表5参照）。

第3は、リピーターが多いことである。4割の人が2回以上内子を訪れている。中には10回以上訪れている観光客もいる。リピーターが多いことは、観光地としての内子町の強みである。

第4は、観光客の満足度が高いことである。来訪者の満足度を尋ねたところ、「大変満足」（33.0%）と「まあまあ満足」（55.2%）を合わせるとほぼ9割にのぼり、大半の観光客が満足していることがわかる（図7参照）。また、内子

図7 目的を達成できたかどうか

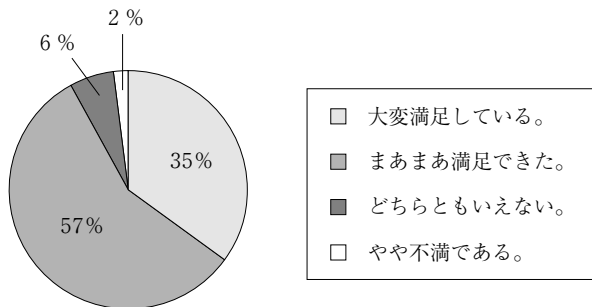
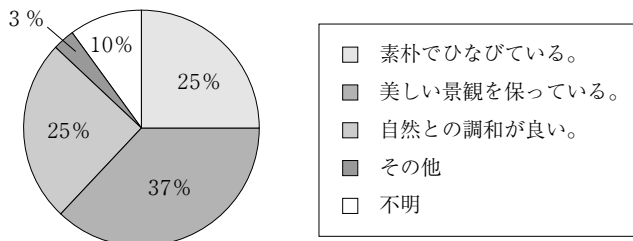


図8 内子町の印象



町の印象を尋ねたところ、「美しい景観を保っている」(36.4%),「自然との調和が良い」(25.3%),「素朴でひなびている」(25.1%)ことを評価している。観光客は内子町の景観が自然との調和を保ち、伝統的建造物がもつ素朴な印象に好感を抱いていることがわかる(図8参照)。今後の地域の修景事業においても伝統的な景観や自然との調和に配慮することが重要であろう。また、保存地区外にも歴史的建造物が残っており、こうした地域の資源を活用した地域づくりが今後の課題となろう。

さらに、来訪者のうちリピーターに内子町の印象が前回と比べてどのように変わっているか尋ねたところ、「非常に良くなった」(13.5%)と「良くなった」(38.1%)をあわせると半分以上の人が良くなったと答えている。但し、僅かではあるが、「やや不満」(2.0%)と答えた観光客がいることに留意する必要がある。不満の理由を16人が具体的に答えているが、「情報と実際とは違う」(25.0%),「接客マナーが悪い」(12.5%),「看板等が分かりにくい」(12.5%),「歩く距離が長い」(12.5%),「地元のお土産が少ない」(12.5%)を挙げている。

第5は、観光客の多くが中高齢者であり、50歳以上が観光客全体の7割を占めていることである。江戸末期から明治・大正期の建造物や景観が保存されていることが、中高齢者の共感と呼んでいることがわかる。また、観光客の満足度が高く、その理由として歴史的町並みが良好に保存されていることを挙げている。中高齢者が多いことを考慮したトイレ・休憩所や飲食店の整備を図ることが今後の課題となろう。反面、20歳代~30歳代の若者層が相対的に少ない。歴史的町並み保存地区に限っていえば、歴史的建造物群が保存されていることを除くと、若者の興味を惹くものが乏しいともいえる(図9参照)。

第6は、観光施設の中で大正期の芝居小屋である内子座の認知度が最も高いことである。内子座は、重要伝統的建造物群保存地区に選定されていない本町商店街にある。観光客は保存地区だけでなく、内子座を訪れるために本町商店街まで回遊してくる。つまり、保存地区の経済効果を内子町の中心商店街である本町商店街に波及させることが可能であり、現に本町商店街に観光客をター



図9 年齢別来町者

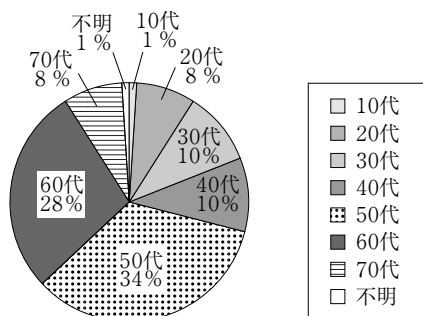
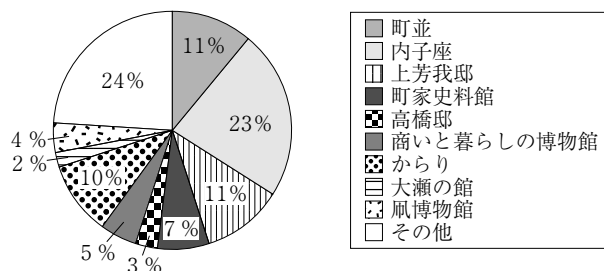


図10 来訪前から知っていた観光スポット



ゲットとした飲食店や宿泊施設が誕生しつつある。しかし、本町商店街の多くは地元住民を対象としたビジネスを継続しており、全国から観光客が訪れ、その結果商店街を通行する客層の変化に充分対応できていない<sup>29)</sup>。また、内子座の認知度が高いが、内子座で開催される芝居やコンサートなどのイベントが必ずしも多くなく、遠くから訪れた観光客は芝居小屋それ自体を見学するに留まっている。内子座の活用策について検討する必要がある（図10参照）。

29) 我々の調査によれば、本町商店街の中に観光客をターゲットにした喫茶店や飲食店を開業するケースがみられる。その件数は少ないが、観光客の増加とともに売上高を拡大している。詳細は別稿において取り上げたい。

### 3.3 マス・ツーリズム化と経済効果の限定性

内子町への観光客が増加しているが、団体客を中心とするマス・ツーリズムの傾向がみられる。観光客の多くが日帰り観光客であり、かつ、内子町での滞在時間が短いために、観光客の増加がもたらす経済効果は必ずしも大きくない。我々の調査では、内子町での滞在時間が3時間未満と答えた観光客の割合は全体の約7割を占めている<sup>30)</sup>。来訪目的で多くを占めているのが「町並み散策・伝統文化施設見学」(53%)であり、これらの歴史的建造物の見物だけであれば、せいぜい2～3時間程度の滞在時間で充分であるということであろう(図11参照)。

もちろん、来訪者の中でも歴史的町並み保存地区を訪れた観光客と「からり」を訪れた観光客では、来訪目的が大きく異なる。町並み保存地区を中心とする内子町の観光客の4分の3が県外からの観光客であるが、「からり」来訪者の多くは県内からの観光客であり、我々の調査では66%を占める。来訪の目的は「からり」で農産物や農産加工品の購入と併設されたレストランでの食事を目的としており、県内でも松山市からの来訪者が約4割を占めている<sup>31)</sup>。

観光客の滞在時間が短いため、消費支出が小額にとどまっている。3,000円未満が全体の半分以上(53%)も占め、1,000円以内に限っても23%を占める<sup>32)</sup>(図12参照)。内子座・上芳我邸などの入館料を支払った程度であろう。多くの観光客は町並み保存地区と内子座を見学した後は、果物などの地域の農産物を少量購入して次の目的地に移動しているとみられる。地域づくりの取り組みによって全国から観光客が来訪するようになったが、それに対応した商品・サービス開発が遅れており、内子町住民はビジネス・チャンスを活かされていないといえよう。観光客の中には、歴史的景観と自然環境・景観が保存された美しい内子町に感動し、土産物として内子らしいものを求めているが、

---

30) 鈴木茂 [2006]。

31) 鈴木茂他 [2006]。

32) 同上。

図 11 滞在時間別割合 (%)

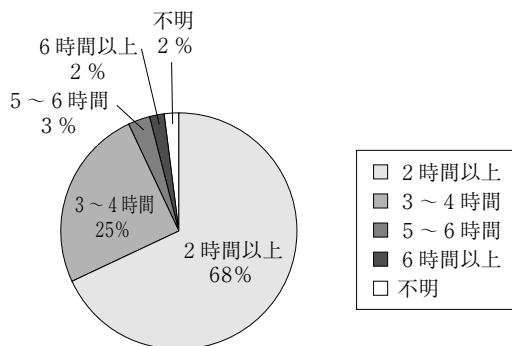
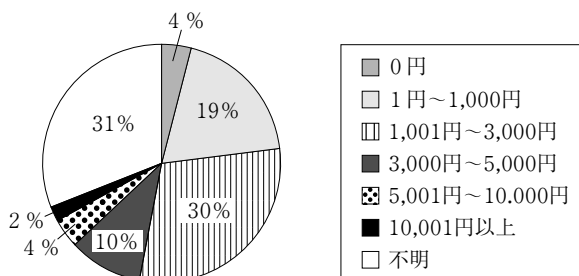
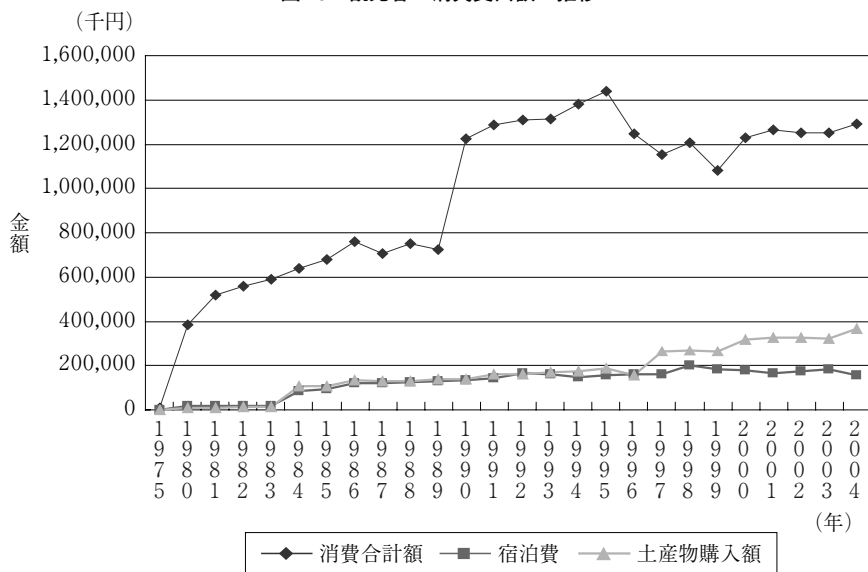


図 12 消費支出額



それに対応できていないといえる。他方、観光客が増加した結果、全国チェーンの土産物店の出店がはじまっており、内子らしさが失われつつあると感じている観光客も少なくない。これは内子町による観光客の消費支出額に関する調査によっても確認できる。観光客の消費支出額は1990年頃を境にそれまでに7～8億円から12～13億円台に増加した。しかし、消費支出額は全体としても停滞傾向を示している。特に宿泊費や土産物購入額が伸びず、低迷し、90年代後半になると宿泊費が減少傾向を示している。観光客数が増加しているが、地域に対する経済的波及効果が低下していることに留意する必要がある。

図13 観光客の消費支出額の推移



(出所) 内子町役場資料より作成。

(図13 参照)。

上記と関連するが、観光客の大半が日帰り観光客であり、日帰り観光客が入り込み観光客の97%を占めている。日帰り観光客数は1980年の12万人から2004年には59万6,000人、5倍に増加したが、宿泊観光客数が逆に減少している。しかし、我々が実施したアンケート調査によれば、観光客の旅行日程全体の中で日帰り観光客は全体の4割であり、旅行日程に1泊以上の宿泊が含まれている観光客は6割を占める。旅行の中で宿泊をするが、内子町に宿泊する観光客は5.9%にすぎないところに問題がある。団体観光客が増加したが、多くの観光客が道後や松山市内のホテル・旅館に宿泊し、内子町には内子座や歴史的町並みの見学を訪れているのである。内子町を見学する観光客は増えているが、内子町に宿泊する観光客が少ないのである。

図 14 旅行日程

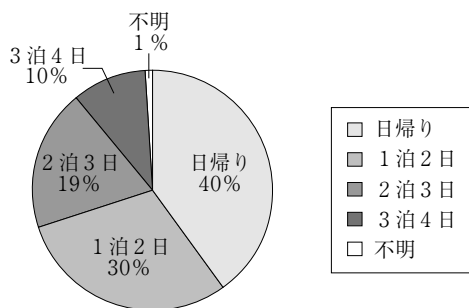
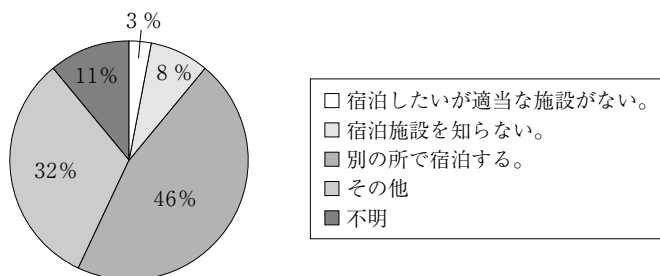


図 15 内子町に宿泊しない理由



内子町に宿泊しない理由として「道後などの別のところで宿泊する」割合が46%を占めるが、「内子町に宿泊したいが適当な施設がない」(3%)と「宿泊施設を知らない」(8%)を合わせると11%を数える。内子町に宿泊している観光客の約2倍の観光客が、内子町に宿泊したいが適当な宿泊施設がなかったり、宿泊施設に関する情報がないために宿泊できなかったと答えている<sup>33)</sup>(図14, 15参照)。

33) 同上。

### 3.4 観光と生活の対立

観光客の増加は、地域住民の生活と観光との対立を顕在化させつつある。観光客の満足度を調査すると、全体の9割以上の観光客が内子について満足している。しかし、僅かではあるが、現状に対する問題点を指摘している。観光客が挙げている問題点は、①町並み保存地区に自動車が進入すること、②トイレ・休憩所が少ないこと、③飲食店が少ないこと、④内子らしいものがないこと、⑤ペットがうるさいこと、などである。内子町来訪者の7割が50歳以上の中高齢者である。町並みはゆるやかな坂道に形成されているため、坂道を歩かなければならない。しかも、町並みは歴史的な町並みであるから当然道幅が狭く、車道と歩道の区別がない。特に秋口の涼しい時期にはトイレの必要性が高まるが、重要伝統的建造物群保存地区であるから、トイレや休憩所を新規に設置することは難しい。また、観光客が増加しているが、観光客の来訪は特定の季節や週末・祭日に集中するから、観光客相手の飲食店は必ずしも多くない。ピーク時にあわせた飲食店を建設すると観光客の少ない季節や週日に観光客を確保することが困難になる。さらに、内子町は中山間地域であり、農林産物のほか、これといった土産物がない。観光客は旅行をして美しい景観や歴史的建造物・文化財をみるだけでなく、当該地域固有の飲食物を味わったり、内子町らしい土産物を購入したいと思っている。しかし、供給体制が整っておらず、需給ギャップが生じ、観光客の満足度を低下させているのである。

また、ペットに対する苦情に典型的にみられるように生活者と観光客との対立現象が生じていることに留意する必要があるだろう。町並み保存地区の建造物の7割が住宅であり、大半が生活空間であると言っても過言ではない<sup>34)</sup>町並みが保存され、旅行雑誌やテレビ・新聞などで紹介された結果、全国から観光客が訪れるようになったが、町並みの全てが土産物店・飲食店などの観光施設ではない。保存地区は住民の生活空間であり、住民は静穏な生活を求めている。

---

34) 2004年11月に行った我々の調査では八日市・護国重要建造物群保存地区の建造物82軒のうち、60軒、73.1%が住宅であった。

生活者にとって観光客の増大は生活環境の悪化を意味し、大勢の観光客に驚いたペットが鳴いたり、自動車の増加で混雑しはじめていのである。自動車の乗り入れ時間の制限などの措置をとり、生活者と観光客との共存を図る措置が求められているといえよう。

観光客の内子町に関する情報源の中で、知人・友人からの情報が意外と大きな割合を占めている。観光客が内子町の情報を得る媒体のうち最も多いのは旅行雑誌（25.4%）であり、4分の1の観光客が旅行雑誌から得ている。旅行雑誌に次いで多いのが知人・友人（23.0%）からであり、口コミでの情報が多い<sup>35)</sup>。リピーターが多いこと（4割）、内子の情報を知人・友人から得ている観光客が少なくないことは、現に内子町に足を運んでくれた観光客の満足度を高める工夫が重要であることを示している。

#### Ⅳ 内子町の観光振興政策の課題

我々が実施したアンケート調査に際して、質問事項に対する回答の他、個々の観光客から具体的な意見を聞くことができた。アンケート用紙に記載されたものを列挙すると、観光客の声には内子町の歴史的町並みをはじめとする観光スポットに対する肯定的評価（91件）と批判的評価（81件）とが含まれている。アンケート調査の結果でも大半の観光客が内子町の取り組みを積極的に評価し、高い満足度が得られていると答えているが、内子町の新たな観光振興計画を立案する際には、件数が少なくとも現状の問題を指摘している観光客の声に耳を傾ける必要があろう。

内子町の町並み保存地区の問題点を指摘したものの中で、苦情が多いものの第1は、自動車対策についてであり、自動車の進入を制限して欲しいという声が多い（10件）。保存地区の道路幅が決して広くなく、観光客の中で中高齢者が多くを占め、保全された歴史的町並みをゆっくり散策したいと願う観光客に

---

35) 鈴木茂他 [2006]。

として、自動車の進入は満足度を大きく引き下げる要因となる。保存地区は商業地区であると同時に住宅地区である。歴史的建造物は現に住宅として利用され、住民のほとんどが交通手段として自動車を利用している。保存地区であるからといっても、観光客の要求を受け入れて自動車の進入を制限することは容易ではない。しかし、保存地区が観光スポットとなり、大勢の観光客が来訪するようになると当然自動車との共存をどのように図るか問題になってくるし、現に観光客の苦情として顕在化している。また、観光客は保存地区だけでなく、内子座を見学するために本町商店街にも回遊してくる。本町商店街の再生計画の中で、自動車との共存をどのように図るか検討する必要がある<sup>36)</sup>。

第2は、自動車に関連して駐車場がないあるいはわからない(5件)とする指摘である。バイパスあるいは国道56号線が町並みの外側に建設され、町並み保存地区が分断されなかったことは内子町にとって幸いであったが、保存地区への自動車の乗入れを制限するにはそれに対応した交通アクセスの改善や駐車場の整備が課題になってこよう。

第3は、地図・パンフレットが見にくい(5件)、案内表示が少なく迷う(5件)という苦情が少なくないことである。また、内子五十崎インターからの案内表示が無い、などの苦情もみられる。観光客が全国各地から来訪していること、中高齢者が多いことなどを考慮して、案内板やパンフレットの改善が必要であろう。

第4は、トイレが少ないあるいはわからない(4件)という苦情である。中高齢者が多いことを考慮すると、景観に考慮しつつトイレの整備や案内板を設置するなどの工夫が必要であろう。

第5は、飲食店が少ないという苦情である。「(軽食をとれる)休憩所があれ

---

36) ①居住住民には乗り入れ許可証を交付し、乗り入れ許可証のある車のみ乗り入れを許可する、②事業者の自動車について進入できる時間帯を限定する、③域外から訪れた観光客の車は駐車場に駐車するよう誘導し、保存地区への乗り入れを禁止する、④居住住民についても土・日曜日や祭日のように観光客が多い特定の日の通行について協力を得る、などの措置が必要であろう。



ばよい」,「立食いうどんが食べたい」,「飲食店が団体客のために入店出来ない」などの指摘がある。近年飲食店が増える傾向にあるが,観光客の多い週末や休日には絶対的に不足し,個人や小グループで来訪した観光客は簡単なものも食べることができないといった状況にある。

第6は,保存地区と非保存地区との連携と整備である。保存地区を訪れた観光客の滞在時間の多くが2時間程度であり,農村景観が保存された石畳地区や道の駅「からり」,さらに,旧五十崎町や旧小田町の方に足を伸ばすケースはまだまだ少ない。また,保存地区の周辺にも歴史的建造物が多く残っているが,周辺地域を訪れる観光客が少ないし,特に誘引策を講じているわけではない。江戸末期から明治・大正期の歴史的建造物が保存されているところに内子町の特徴があり,非保存地区に存続している歴史的建造物を保存することが観光地としての魅力を高め,観光客の増加による混雑現象を緩和させる効果を期待できよう。

第7は,生活者と観光客との共存である。保存地区には住宅が約7割あり,そこに住民が暮らしている。一部は土産物店や飲食店として利用され,観光客の増加による経済的便益を享受している。また,住宅の一部では,当地の果物や加工農産物を軒先で販売する動きが出はじめている。しかし,観光客の増加は居住環境を悪化させ,居住者と観光客との利害が対立する傾向もみられる。苦情の中に「犬の音が気になる」と指摘したものがある。大勢の観光客が来訪したことで犬が興奮したものと推測されるが,両者の共存の道を検討する必要がある。

以上の観光客アンケート調査の結果を踏まえて,我々は内子町の観光振興政策の課題として下記のような提案をしたい。

第1は,観光客の多くを占める中高齢者への対応である。保存地区が緩やかではあるが傾斜地であること,保存地区と本町商店街を回ると歩行距離が長くなることを考慮して,トイレの整備や表示,車椅子の貸与などの配慮することである。

第2は、自動車対策である。観光客の多くが満足しているが、苦情の中に自動車の乗り入れに対する苦情が多い。保存地区をゆったりと散策したいという意見があるように、自動車の乗り入れを制限し、観光客がゆったりと散策できる環境を整えることが課題であろう。もちろん、保存地区は住民の生活エリアでもあるから、一律に自動車の乗り入れを禁止することは難しいであろう。しかし、少なくとも域外から訪れる観光客の自動車の乗り入れを制限し、脚の不自由な高齢者には車椅子あるいは電動車椅子を貸し出すなどの措置が考えられる。また、事業用自動車の乗り入れについては時間制限をし、観光客が多い時間帯の乗り入れは原則として禁止する措置が考えられる。観光客は毎日コンスタントに訪れているのではなく、週末や休日など来訪する観光客の多い日を予測することが可能であろう。また、JRなどの公共交通と連携して、内子町への交通手段をマイカーから公共交通にシフトさせ、全体として交通量をコントロールする等の措置が課題になってこよう。観光客の満足度が高まれば、知人・友人を通じて内子町の魅力が語られ、来訪者がさらに増加することを期待することができる。

第3は、食事・休憩所の整備である。観光客の苦情の中に、飲食店が少なく、食事をしようとしても多くが団体客によって予約されていることが挙げられている。観光客は、保存地区の見学で長い距離を歩き、休憩と簡単な食事、できれば内子らしい食事ができることを望んでいる。本町商店街の空き店舗を活用して「からり」の「アンテナショップ」を出すことも考えられよう。例えば、山菜料理、水車米、果物、熟した柿など内子町らしい飲食物を提供すれば、内子らしいものが欲しいという観光客の要望にも応えることができよう。

第4は、休憩用の椅子や広場の整備である。中高齢者が多く、大型観光バスで長時間ゆられて内子町にたどりつくことを考慮すると、歴史的景観が保存された内子町でゆったりと休憩したいという希望が強いものと考えられる。域内のお寺・広場や空き地を活用した休憩所の整備なども検討に値しよう。

第5は、内子座の活用である。観光客が内子に来訪前から知っている観光施

設の中で、内子座の知名度が最も高い。しかし、内子座で芝居などが上演されていることが少なく、観光客は単に大正期の芝居小屋を見学しているにすぎない。「奈落」などの芝居小屋の「からくり」を実際に作動させたり、地元小中学生や高等学校生徒、住民グループによる芝居・音楽などを実演し、生きた「芝居小屋」を鑑賞できるようにすることも検討されてよい。

第6は、本町商店街の活用である。内子町の観光振興にとって本町商店街は重要な地位を占めている。特に、JRを利用して内子町を訪れる観光客は、本町商店街を経由してまず内子座を見学し、「商いと暮らし博物館」を見ながら、保存地区に至る。また、町並み駐車場から歴史的町並みに入る観光客も必ず内子座を見学するから、本町商店街を通過する。しかし、本町商店街においては一部に観光客をターゲットとした小売店や飲食店が誕生しつつあるが、全体としてまだまだ地域住民をターゲットとしたビジネスが行われている。地域住民だけでなく、観光客を対象にした商品やサービス（土産物、飲食店等）がもっと開発されてよいと思われる。商店街の中に空き地や空き店舗がみられる。そうしたものを活用して地元高校生や学生による起業家プログラムなども一案であらう。

第7は、保存地区周辺の整備・活用である。内子町内には保存地区の外にもまだまだ歴史的建造物が残されている。非保存地区の歴史的建造物を保存することによって、内子町の歴史的景観の厚みが増すことが期待される。また、観光客の中に休憩場所や飲食店が少ないという苦情があるが、保存地区周辺の飲食店をもっと活用することが考えられてよい。

第8は、生活者と観光客との共存の道を検討することである。観光客の苦情の中に、自動車が進入してくること、ペット（犬）の鳴き声などが挙げられているが、観光客の増加とともに生活者と観光客との対立現象が生じはじめていることに留意する必要がある。住宅が観光客相手の土産物店や飲食店に転用されたり、軒先を利用して観光客相手に果物などを販売する動きが見られるように、観光客の増加は保存地区の活性化をもたらしていることは間違いない。

しかし、自動車やペットに対する苦情に見られるように、観光客の増加が生活者と観光客との対立あるいは混雑現象をひき起こしつつあることに充分配慮し、有効な対策をとる必要があろう。

第9は、保存地区と本町商店街、「からり」、石畳地区、旧五十崎・小田町との連携である。保存地区と「からり」の客層は一部に重複し、相乗効果がみられるが、両地区で客層は異なる。保存地区を訪れた観光客が「からり」まで足を伸ばすことは少なく、また、逆に「からり」を訪れた観光客は保存地区を訪れていない。さらに、全国から来訪している観光客の多くは旧内子町の歴史的町並みの視察に訪れているのであり、四国観光の一環として2時間程度滞在するにとどまっている。滞在時間を伸ばし、新内子町全体の活性化に活用するには新内子町全体を対象とした総合的な観光振興計画の立案と実施が課題になろう。

第10は、歴史的町並み保存事業と村並み保存運動・グリーンツーリズムとの融合である。既に述べたように、内子町は町並み保存事業だけでなく村並み保存運動に取り組み、農村らしい景観が保存され、農家民宿や農作業体験に取り組む農家が増加しつつある。歴史的町並み保存地区がマスツーリズム化による混雑現象を回避し、農村景観と農村文化を保全して維持可能な観光地域(sustainable tourism)として発展するには、グリーンツーリズムとの連携をどのように図るかが課題になってこよう。観光客の来訪目的の中で、「農村らしい景観」を楽しみたいとする希望が少なくないことを考慮するとその可能性が高い。

第11は、市町村合併後の重要なプロジェクトとして龍王公園の再開発が計画されているが、既存の町並み保存事業やグリーンツーリズム運動との有機的連携を図ることである。同公園は温泉・老人福祉施設・レクリエーション広場・児童遊技場などが整備された総合公園であるが、一部施設が老朽化し、再開発される予定である。とくに老朽化している龍王荘は、町民を主要な対象に、温浴施設を中心とした健康増進施設として整備される予定<sup>37)</sup>であるが、宿泊機

能を高めるとともに、住民の主体的取り組みが芽生え始めているグリーンツーリズムの支援機能の強化が期待される。

内子町は2005年1月1日に、旧五十崎町・小田町と合併し、行政エリアが拡大した。旧五十崎町は、小田川の自然石による住民参加型護岸工事を全国的にも早くから取り組むとともに、古くから手漉き和紙の産地であったことから、400年の伝統を誇る大風合戦と五十崎風博物館の整備などに取り組んできた。また、旧小田町は行政域が四国山地まで広がる自然景観に恵まれた地域であり、小田深山溪谷や城の台公園を中心とした地域づくり、スキー場の開発などに取り組んできた地域である。合併は、旧内子町を対象とした観光振興計画だけではなく、それぞれの地域の特徴を活かし、相互に連携した新しい観光振興計画の立案を迫っている。新内子町の地域づくりの課題は、旧内子町における地域づくりを継承発展させると同時に、旧五十崎・小田町の地域づくりと統合した総合的な地域政策を立案し、相乗効果を発揮させることであろう。この点についての検討は別稿の課題としたい。

---

37) 内子町役場資料より。